

郷土芸能の拡散と収斂

——ポストコロナの朽木古屋六齋念仏踊り

武藤大祐（群馬県立女子大学）

2023年の夏、コロナ禍（COVID-19）で休止していた祭りや郷土芸能が日本各地で四年ぶりに再開された。この休止期間の間に残念ながら廃絶となった芸能は多いが、無事再開された芸能もまた様々な影響を受けている。

発表者が継続的に調査している滋賀県の朽木古屋六齋念仏踊りは、集落の家族単位で行われる盆行事であるが、過疎化を背景に、2016年以降は市の教育委員会と有志団体の呼びかけによって外部からアーティストやダンサーを踊り手として迎え入れる独特のプロジェクトとして継続してきた（武藤 2019）。この芸能もまたコロナ禍で三年間の休止を余儀なくされたが、その間、文化庁の「文化遺産を活かした地域活性化事業補助金」および「地域無形文化遺産継承のための新しい生活様式支援事業」を活用して、アーティストの武田力（たけだ・りき）による一般向けの「オンライン稽古」が行われてきた（これについては第74回舞踊学会大会・口頭発表において紹介した）。

2023年に六齋念仏が再開されると、このオンライン稽古は結果的に、限界集落の盆行事に新たな「拡散」と「収斂」をもたらした。オンラインで六齋念仏を習得した参加者が複数、参加の意志を表明し、うち三名（発表者を含む）が実際に古屋で奉納に加わったのである。他方では、休止期間中に、既に高齢であった地元の継承者（保存会）のうち二人が亡くなっていた。これにより、継承者と外部者の比率は大きく変動した。本発表ではこのことが意味するところについて、参与観察と聞き取りによって跡付け、考察を加える。

2023年8月上旬、例年通り14日の奉納前に数日間の稽古期間が設けられ、地元の継承者から、アーティスト、そしてオンライン稽古の参加者まで、会場となる玉泉寺に顔を揃えた。地元の継承者を別にすれば、メンバーはおおむね三つの世代に分けられる。すなわち第一世代：プロジェクトに立ち上げから関わっているアーティストやダンサー、第二世代：彼らに習った地元の孫世代（cf. 武藤 2019:186）、そして第三世代：オンライン稽古の参加者である。久しぶりに振りの思い出しをする人から、これまで他のメンバーと同じ空間で稽古したことがなく、フォーメーションを一から教わる人まで、経験の蓄積量には幅が見られた。今まで映像でしか見たことがなかった寺の本堂に初めて入り、感動する声も聴かれた。

第三世代は、第二世代と同様、武田を中心とする第一世代から指導を受けており、玉泉寺でも必然的に指導の軸は第一世代であった。とはいえ第

二世（二名）も第三世代に比べればはるかに経験豊富であり、時には第三世代を指導する側に回る場面も見られ、世代交代が進んだことは誰の目にも明らかであった。第二世代の一人は連日、時間通りに稽古に現れるなど、以前にもまして意欲的に取り組んでいるように見受けられた。

他方、亡くなった継承者のうち一人は、念仏を担当するなど、朽木古屋の六齋念仏を実質的に牽引する存在であった。念仏はコロナ禍以前にも第一世代が習い始めてはいたが、今年は彼らのみで務めることになったため、猛練習が行われていた。

奉納は、2017年に復活した家廻りの形態（武藤 2019:186-187）が取られた。第一世代（四名）が念仏と鉦（および笛の一部）を担当し、その他のメンバー（六名）が踊る編成で、七軒の家を廻り、帰省した血縁者たちの前で披露したが、地元の継承者たち（保存会の三名）は傍で見守りつつ、しかし踊りに加わることはなかった。つまり朽木古屋六齋念仏は、2016年にアーティストたちの参加によって再開されて以来初めて、（笛を除いては）プロジェクトのメンバーのみで実施されたことになる。

このように、四年ぶりの奉納は以前とは相当に異なるものに変化した。とりわけオンライン稽古という、コロナ禍を契機に一般化したデジタル技術の活用により、実質的に継承者たちの手を離れた形で奉納が行われたことは、このプロジェクトが新たな局面を迎えたことを示していよう。酒井貴広は、今日では地域の儀礼や文化もまたインターネットを含む多様な空間で形成された言説からの「還元」を受け入れつつ営まれる趨勢を指摘するが（酒井 2023:90）、朽木古屋六齋念仏においては、コロナ禍がそれを顕著に加速したといえる。

2023年の奉納は、数日前からの台風の接近が懸念されていたが、初日の稽古の後、保存会会長は「せっかく練習してくれたのに〔中止するわけにはいくまい〕」と、通常よりも一日前倒しして実施することを決定した。また奉納後の直会の挨拶では、「いつまでも、末永く続けていってもらって」とも語った。こうした表現からは、この芸能に対する当事者の意識が質的に変化していることが窺われる。あるいはこの芸能の「当事者」がよいよ交代しつつあり、芸能の意味そのものも変わろうとしている、というべきであろうか。

【参考文献】

酒井貴広(2023)「地域とサイバー空間の相互作用に支えられる儀礼の文化的持続性」、原知章編著『文化的持続可能性とは何か』、京都：ナカニシヤ出版、pp. 61-94。

武藤大祐(2019)「限界集落の芸能と現代アーティストの参加」、『群馬県立女子大学紀要』40:181-198。